

「学習につまずきのある子供の実態報告 子供の特性に応じた支援方法を考えるセミナー」報告

渋谷区
日本財団

1 開催概要

(1)日時 平成30年7月18日(水) 18:30～20:20

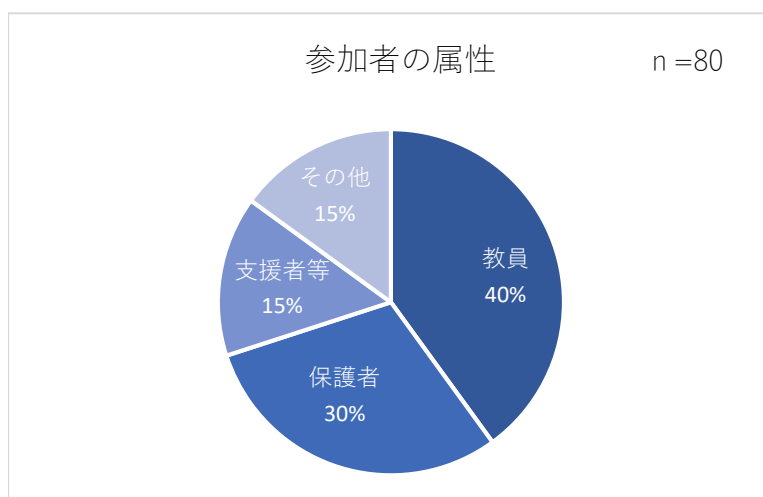
(2)場所 美竹の丘・しぶや 2階 多目的ホール

2 参加者

(1)参加者総数 100名(事前申し込みによる一般参加者80名に加え、来賓等を含めた参加者数)

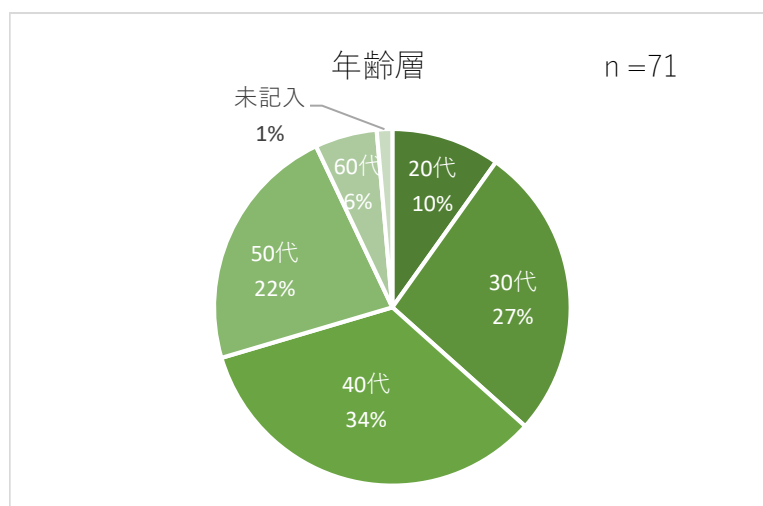
(2)一般参加者の属性

一般参加者数	80名
① 教員	32名
② 保護者	24名
③ 支援者等	12名
④ その他	12名



(3)年齢層

アンケート回収者数 71名(アンケート回収率 89%)



3 セミナー内容の概略

(1)開会の挨拶

長谷部 健（渋谷区長）



本セミナーは、渋谷区が昨年度より取り組んでいる「特別な才能に着目した新たな教育システムの構築」事業の取組の一つとして、東京大学先端科学技術研究センターと連携し、実施した「学習のつまずきの背景を捉え、学びを支えるためのテスト」の結果を含む内容について、「渋谷区×日本財団ソーシャルイノベーション連携協定」に基づき、渋谷区と日本財団の共催において開催するものです。

渋谷区では、平成28年10月に、渋谷区の未来像を「ちがいを ちからに 変える街。渋谷区」とする新たな基本構想を策定しました。また、渋谷区教育大綱においては、その基本方針として「人間が持つ多様性を理解し、人種、性別、年齢、障害の有無などにより差別されることなく、人として尊重され自己実現できる社会を目指す」ことや「自立する上で支援と配慮が必要なスペシャルライツ(特別な権利と個性)をもつ子どもが共に学び持てる能力と個性を花開かせる教育、子どもの優れた能力を見出し、その可能性を確かなものにする教育を推進する」ことを掲げております。本日のセミナーの内容は、渋谷区基本構想並びに渋谷区教育大綱の具現化につながる内容が含まれており、私自身も期待しております。

本セミナーが、渋谷区の児童・生徒がよりよく学んでいくために意義のあるものになることを願うのみならず、渋谷区からの発信により関係者のネットワークが構築され、このセミナーがこれからの多様な教育の在り方について考えていく契機となることを願っています。御参加の皆様、本日はどうぞよろしくお願いいたします。

(2)「学習のつまずき背景を捉え、学びを支えるためのテスト」報告

平林 ルミ(東京大学先端科学技術研究センター 特任助教)

近年、通常の学級へのICT機器の導入が進んでいます。こちらの写真は東京都内の中学校の通常の学級で書くことが苦手な生徒が学んでいる様子です。生徒の横にある机にはタブレットPCとスキャナ、プリンタが置いてあります。紙のプリントが配られると、スキャンしてプリントを取り込み、解答を入力し、それを印刷して提出しています。

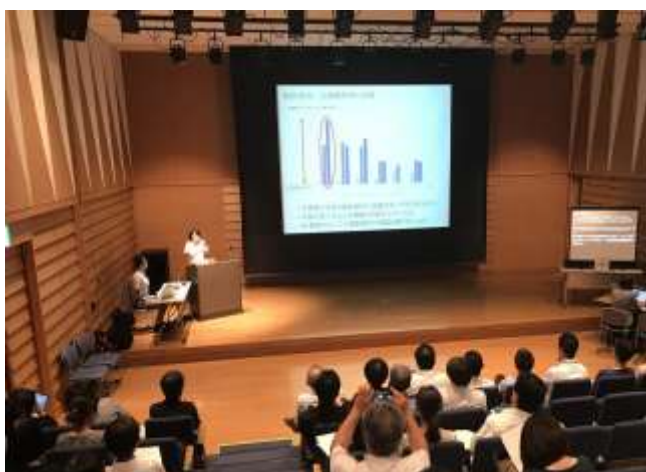
読み書きを別の方法で補うという配慮は、高校入試や大学入試でも認められています。神奈川の県立高校にワープロ解答で入学した生徒もいます。今年は、ワープロ入力による解答の配慮を申し出て、大学受験もしました。問題を隣で読んでもらう代読で入試を受ける生徒もいますし、計算の困難を計算機で補って受験した生徒もいます。このように読み書き計算という学習の基礎の部分が特異的に苦手な児童・生

徒には、個別のニーズに応じた合理的配慮がなされることが法律に明記されています。

これまでの例は、ニーズのある個人だけが別のツールを使うわけですが、近年、通常の学級に一人一台という形でタブレットPCを導入している自治体もあります。渋谷区では、昨年度から公立の小学校・中学校で一人一台タブレットPCが導入されています。タブレットPCは個人の苦手を補うツールになりますが、それをうまく活かすためには、どの機能がどのように役立つのかが現場で共有されることも大切です。

少し話が変わりますが、東京大学先端科学技術研究センターが日本財団との共催で取り組んでいる「異才発掘プロジェクト ROCKET」を通して、読み書きの困難に関する調査をしたところ、学校不適応を主訴とする子供たちの約20%が「読み」または「書き」に困難を示すという結果となりました。通常の学級において読み書き困難がある児童・生徒は2.4%という文部科学省の統計結果もあります。不登校の背景に読み書きの困難がある子供はかなり多いと考えられます。読み書き計算は、小学校1年生から少しずつ習得していくものなので、本人でさえも自分が読み書き計算が苦手ということを認識していない場合が、たくさんあります。

「学習のつまずきの背景を捉え、学びを支えるためのテスト」は、渋谷区の「特別な才能に着目した新たな教育システムの構築」事業の取組の一つとして、平成29年度に実施したもので、渋谷区の全小・中学校で、4184名が参加しました。通常の学習場面において、集団形式でプリントを配布し、学級担任の教示により行いました。その解答用紙を全て採点した結果、通常の学級に学び方の異なる子供が存在していることが分かりました。



ポイントは、個々のもてる力を発揮するための学び方を見付けるために、学びの方法を「比べる」ということです。普通に読み書きしている状態と、文章を音声で聞く、漢字を選択する、計算機を使う等の別の手段で補って介入した状態を比べてみます。読み書き計算が苦手な子供は、それができる状態になったことがないので、比べてみて初めて、自分は「選択肢があったら解ける」、「音声で聞いたらよく分かる」等と気付きます。読み書きが苦手な子供にテクノロジーを使ってもらいと、自分で「こっちのほうが楽だな」と気付く子供がいます。ですから、この評価では「比べる」ことに視点を当てています。

この度のテストの結果では、補助があった場合において、書くことは6～10.6%、読むことは2.5～9.6%、計算することは4.7～9.5%の割合で、テスト結果が良い方向に変化しました。早期の介入によって、授業についていける範囲が広がる可能性があります。通常の学級でこそ、読み書き計算の習得方法に多様性をもたせることで、子供たちが学びのスタートラインに立てるケースが少なくないと考えます。

(3) 子供の特性に応じた学習支援の実践について

井上 賞子(松江市立意東小学校 教諭)

今日は小学6年生だったMさんの話をします。このお子さんはたいへん辛い状況にありました。私は転勤をしてきて、彼と出会いました。読み書きは本当に難しく、読解では1年生の「おおきなかぶ」も読めないと保護者にも言われました。そして、激しい不適応があって、苦しい状況にありました。書きについては苦手なようでしたが、書いたものに構成要素はありました。もっと書けない子をたくさん見てきましたので「あれ?」と思いました。さらに、家ではネットでいろいろなことを読んでいると聞きました。このことから、全く読んでいないことはないと思いました。この子は算数だけはやる、という話も聞きました。6年生の段階で、一人で算数の勉強ができるということは、読解ができないわけではないと思いました。きっと、「どうせ自分はやれない」という気持ちが広がっていたのだと思います。本来の力が発揮できる入口が見付けられたらと願い、介入を始めました。



私はICTを使った介入はいろいろとやっていますが、多くのケースでは、学習の一部、その子に必要な部分だけということ意識して介入をしています。しかし、彼の場合はかなりの部分でICTを使いました。6年生だったからです。学びの支えがあって、学びやすくなると言うだけではなく、補って彼が自分の学習を次に進めなくてはいけない段階でした。

「読み」の底上げと見通しを支えるツールとしては、「Voice Of Daisy」、「i暗記」、「漢字ドリル」、「Safari」を使いました。「書き」の見

通しを支えるツールとしては、「小6かん字ドリル 楽しく学べる漢字シリーズ」「camera」を使いました。少しずつ学習が進み、書きたいという気持ちが上がるのが見えてきましたので、「書ける」ことが保障されることは大事だと思いました。2学期になって思ったのは、あと半年しかないということです。中学校に入った時に、自分の学びを継続するにはどうすればいいのだろうと悩みました。ただ安心感を与えて、きちんと学ぶことをスタートした1学期でしたが、それだけではだめだと感じました。そこで取り組んだのがノートテイクでした。これは、情報や思考の整理や既習事項の確認ができます。彼の書いたノートは読めません。ノートテイクは、アプリを組み合わせるのではなく、彼が学習の内容を取り込むためにやろうと思いました。その時に、彼の中学校ではWindowsのパソコンを使っていたので、それを用意して、OneNoteを活用しようと考えました。慣れてくると、ある授業の際に他の子がノートに書いていることを彼は同じようにタブレットPCにまとめていきました。かつては友達と違う方法ならやらないと言っていた彼が、明らかに違う方法を持ち込んで授業に参加しました。これは、自分の学びについての納得と誇りの表れだと思います。

こうして、彼はあるとき私に、かつてのことを振り返って「特別な教室っていいながら、何も特別じゃなかった。同じことをやらないからって、できないからって叱られた。」と言いました。特別支援学級でさえ、こういうこ

とが起きていました。通常の学級では、もっとだと思います。皆さん、義務教育なのです。どこにいても、その子の教育は、保障されないといけないのです。ICTという方法に出会え、子供と一緒に学ぶ方法を得たと思っています。もちろんICTが全部を解決するわけではありません。でも、選択肢として選べることで、この子たちを大きく変えると思います。

(4)トークセッション『『読み』『書き』『計算』に困難のある子供の学びを支えるために』

井上 賞子(松江市立意東小学校 教諭)

中邑 賢龍(東京大学 先端科学技術研究センター 教授)

齋藤 仁美(渋谷区教育委員会事務局 教育振興部指導室 指導主事)

高島 友和(日本財団 国内事業開発チーム チームリーダー)

高島(ファシリテータ) / 今回のテストの結果報告や実践報告について感想等をお聞かせください。

中邑 / ここまでテクノロジーの代替手段としての活用が進んできたことは感慨深い。35年前から、できないことをテクノロジーで補う研究をしてきました。頑張れと言われてもできないことを求められ、どんどんつぶれていく人たちを見てきた。最初に支援を始めたのは、重度重複障害のある人たちでした。寝たきりの子供たちを目の前にして、当時の教授が「しゃべれるようにしろ」と。「どうしてですか」と尋ねると、「この人たちは胃が痛いと訴えているが、薬を飲んでも治らない。しゃべれるようになったら、きっと治ると思う。」と。実際、テクノロジーを使って野球ゲームを作り、その人たちと遊びました。ゲームをできるようにすると胃の痛みが治る人たちが増えた。みんな、そのゲームにはまる。「どうして？」と聞いたら、「だって、これを使えば先生、対等だ。」と彼らが言うわけです。技術は人を揃えるのだと分かった。教育は「頑張れ、頑張れ」と言うけれど、頑張るだけでは揃えられないのです。小学校、中学校に行っている子供たちは、能力が一見フラットに見えるかもしれないけれど、一人一人全然違う。スタートラインが違うのに、周りと同じようにということをさせるから、しんどい子はしんどい。それは、一つの特性の差というもの。もっと簡単に子供の実態を見たらよいのではないかということで始めたのが、いわゆる「比べるテスト」です。これは、観察なのです。子供をよく見ることが大切。例えば、授業中カーテンに隠れる子。理由を聞くと、「カーテンに隠れると字を書かなくていい。そうすると先生の話がよく分かるんだよ。」と。つまり、書いているとそのことに集中して先生の話が聞こえてこないのだと。みんなと一緒に同じことをしなくてはいけないということを思った時点で、まっとうな支援は難しくなるということ、みんな違う支援をしなくてはならないということに、みんな早く気付かなくてはいけないんじゃないかなと思います。

井上先生ははじめ、コンピュータのこの字も難しかった方ですが、今では日本を代表するICT機器を活用した支援ができる先生になっている。井上先生から、かつて、夏休みに学級の児童40名にそれぞれ違う宿題を出した話を聞いたことがあります。

井上 / 通常の学級の担任をしていたとき、学力差がすごく激しいクラスを受けもったことがありました。4年生だったのですが、まだ九九も分からない子もいれば、すごく理解が早い子もいた。すると、同じ宿題を出しても、10分で終わる子もいれば、10日間かけても終わらない子もいるという状況になる。夏休みはチャンス、授業が進まないの。だったら、このチャンスに自分が何をすべきか自分で申告させようと試みました。小

テストをたくさん夏休み前にさせて、あなたは夏休みに何をするとよいですかとうことを問いました。すると、「九九をもっと頑張りたい」という子や「漢字が2年生の分くらいから分かりにくいからそこから覚えたい」等という子たちがいました。その子にとっていま必要なことをするべきだろうと考え、それぞれの申請に応じた宿題を出しました。その話をしたら、中邑先生がたいへん興味をもってくださったのですけれども。

中邑/子供たちとの対話の中で、一人一人の能力を見立てて、その子に合った課題を出しているという、これは教育の基本だなと感じましたし、それを平林さんはじめ、簡単に見立てられるテストを作ったということがすごくよいことだと思う。これが渋谷区で広がっていくと、渋谷の子供たちの中に学びに自信のない子はなくなっていくんじゃないかと、二人の報告や発表を聞いてわくわくしました。

高島/見立て、という話もありましたが、今回このテストを実施されたこと背景等について齋藤指導主事からお願いします。

齋藤/平林先生からの報告にもありましたが、このテストは、渋谷区が平成29年度から東京大学先端科学技術研究センターと連携して進めている「特別な才能に着目した新たな教育システムの構築」事業の取組の一つとして実施したものです。その目的ですけれども、これは、井上先生の発表で触れられた「義務教育だから」と



いうことにもつながりますが、渋谷区において、「公教育として、より多くの子供たちに多様な教育機会を確保する」ことを目指して取り組んでいます。その事業の背景としては、冒頭で渋谷区長から話がございましたように「ちがいをちからに変える街。渋谷区」という渋谷区基本構想を教育の場で具現化していくものとして取り組んでいるということがあります。もう少しだけ話してよいですか。今、会場を見渡させていただきまして、区内外の教員はじめ、保護者の皆様、研究者の皆様、区の特別支援教育の支えてくださっている皆様、多くの皆様方が、夏休み前の御多用な中、関心を寄せてこの会場にお越しいただいている、このことに深く感謝申し上げます。ありがとうございます。それから、このテストが実施できたのは、区の施策として取り組みたいということがあったとしてもそれだけでは難しく、やはり、区立学校の管理職、教員の皆様方が理解してくださり、実際に動いてくださったということがあって実施できたものです。そのことをとても感謝しています。また、このテストの結果は他にはない意義のあるものだと思っていますが、その結果から得られることをまず、渋谷区の子供たちに還元していきたい。そのためにも、今後も東京大学先端科学技術研究センターと連携して事業を進めていきたいと考えています。

高島/ちょうど齋藤さんに話していただきましたが、今日は本当にいろいろな方々に来ていただいています。区内の先生方、区外の先生方、親御さん、そして多くの支援者の方々がいらっやっています。そういう意味では、みんなで子供たちを支えていこうという思いのある方々が今日この会場にいらっやるとい状況です。今回のいわゆる「比べるテスト」については、結果もそうですが手法が特徴的だと思っています。井上先生が40人に対して40通りの宿題を出されたというのは子供の見立てや観察があってこそだったと思います

が、今回の客観的な尺度としてのテストについて何か御感想等ありますか。

井上/教員は教室を任されてしまうので、その人の考えでいろんなことが進んでしまう。それが正しいのか、正しくないのか、必要なのかそうではないのかを含めて荷が重いところも確かにあります。「比べる」のは大事だと思っています。今回、無理のないやり方ですよ。やっているとなんか分かる。これはこの子、苦手だなど。苦手だと分かってはどうすればいいかは難しい。でも比べることでこの子はこうしたらできるというヒントがそこにあるんです。ですので、実態把握だけでなく、方法につなげられるヒントや提案が、このテストの中に含まれていることがすごいなと思いました。それを、この学校だけということではなくて、渋谷区のように、みんなで考えようということができるのは、うらやましいと思いました。

高島/少し踏み込んで聞きたくなりましたが、渋谷区で実際にこの取組を実施しようと考えたときの学校等のリアクションはどのようなものであったのか。齋藤指導主事、話せる範囲でお願いします。

齋藤/正直申し上げて、体制は学校によって違いがあります。これは、渋谷区だからということではなく、今会場がたくさんの方がうなずいてくださっていますが、やはり、学校によって子供の実態が違いますし、地域性、それまでの経緯というものも違うので、このようなテストを実施する場合においても、取り組む体制というのは学校によって様々であったというのが実際のところなんです。ただ、どの学校も、その学校の実態に照らして、無理のない方法で区の施策を理解しての実施をしていただいたということは言えると思います。

高島/ありがとうございます。中邑先生は、私共とともに「異才発掘プロジェクト ROCKET」をやっていた中で、それぞれ学校によって違うということや教育委員会によって違うというようなことがおありだったと思いますが、今回のこのような取組を横展開していくことは可能なのでしょうか。それは難しいのでしょうか。

中邑/これは、可能云々ではなくて、そうしていかなくてはいけないと思っているところです。できないことをやれやれと言い、子供の学びを取りこぼしていく。これは大きな過失だと言えるかもしれない。障害者差別解消法ができて、いわゆる公的な機関は合理的な配慮が義務付けられています。実はこの度東京都が素晴らしい前進をしました。それは何かというと、この6月に都の条例として、私立を含め全ての機関に対して合理的配慮を義務化した、これはものすごい進展です。配慮の一つとして認めていかなくてはいけないという時代が来ている。ただ、障害者というところは引っかけますが、まずはこの時代の流れの中で、その子供たちが引っ張っていくにしても、「ああ、それでもいいんだよね」という雰囲気が先生たちの中にできてくるといいのかなと思います。いわゆる「比べるテスト」のよさは、自分はできている子供たちが実はできなくて困っていることに気付くことです。そして、できないことがあることが決して悪いことではない、恥かしいことではないということに気付いていける風潮ができてくるところが、これから起こってくる。そうすると自然と横展開が起こってくるのではないかと私は思っています。

高島/ありがとうございます。話にありました東京都の動きというものは、私も一歩進んでいるなど感じたところ
です。日本財団は、ある意味、障害者支援といった文脈の中で、どうしても障害という言葉にとらわれがち
なのですけれども、中邑先生のおっしゃるとおり、それが一つのきっかけになりながらも一步一步進んでいけ
るとよいと思ったところです。ここでまた、井上先生の話の思い起こすと、井上先生はICTという方法に出会っ
ただけで、ICTが全てではないし、個々の特性に合ったアプローチをされているのだなと思いましたが、とはい
え、実際に活用できている教員は多くはないかもしれないという中で、教員としてのICTとの向き合い方を教え
ていただきたい。

井上/中邑先生の話にも出てきましたが、私はアナログ人間でテクノロジーに詳しくはありませ
ん。ただ、皆さんもそうだと思いますが、新しい学年、学級を受けもち、新しい子供たちと出会うとき、子供た
ちとどんなふうに勉強しようかと思ひ、いろいろな書籍を調べたり、材料を探しに行ったりしますよね。その中
の一つとしてICTに出会いました。そしてICTからは本当にいろいろな可能性があることを教えてもらいました。
ただし、子供が興味をもつからとか、喜ぶからだけで導入すると、たいていうまいかないなと思っています。
やはり、見立てが重要なので、今回のテストのように、この子にはこれが有効かもしれないという入口が見え
てくることは大きいと思います。先程の事例の話のいろいろなところなのですが、そうすると、「タブレットを
今日買いに行きます、明日使います」という方がいらっしゃいます。それがいけないとは言いませんが、彼の
場合はすでにスキルとして入力できる状態だったからあのような実践になったわけなのですけれども、入力す
ることが難しい子供にタブレットを渡して使うように言っても、本人にとって方法になっていない状態で持ち込
むと、本来はタブレット活用の有効性が見込まれるにもかかわらず、手書きの方がいいかもしれないと思うよ
うなことが起こり得る。そうすると、本人にとって重要な手段である可能性のあるタブレットPCの活用が本人に
よって否定されてしまうことになる。ひらがなだって、かたかなだって、はじめは練習して書けるようになって、書く
ということを手段にできるということがある。その子供にとって、それが手段として使えるような状態に、個別指
導の場面や家庭等で練習してから教室で使うようにしていくことも重要です。

高島/井上先生ご自身もICTと出会い、そのリアリティーを得てきたんですね。

井上/それまでアナログでいろいろな教材を作ってきましたが、音を補うとか、リアルタイムで子供に結果を返
すとか、どんな風に間違えたのかの過程を記録するとか、そういったことはタブレットPCに出会って初めてでき
たことだったのです。これができるのなら、あの子にこう活かせるんじゃないかというようなことがつながっていく
感じてした。

高島/発表で感じたことは、そういうことの積み重ねで一步一步進んでいるのだなということです。もしきた
ら、子供も大人もそういうリアリティーをもちながら、進んでいくのかなと思いました。今日はいろいろな方々が
お越しいただいているので、そういう方々に対して、明日からの実践につながるヒントをそれぞれお話しくださ
い。

中邑/平林さんからの調査結果の報告によると、代替手段を用いれば成績が変わっていきだろうと推測される子供たちがかなりの数いるということが分かりました。そういった子供たちに、調査をして終わるということではなく、何とか手を差し伸べられるようなことをやっていただきたいと思っている。その一番のバリアとなるのが、先生方の意識だろうと思うのです。他の子と違うじゃないかという。「他の子と違って当然なんだ」「やり方は違っていいんだ」とマインドを変えていただくことが、一つ重要だろうと思います。いわゆる「比べるテスト」の中に電卓を使うものがありました。一度、算数のテストについて、「みんな電卓を使ってやっていいよ」となってしまうと、自分にできるやり方でやっていいんだという雰囲気ができると思うんです。ただ、ここで一つ制度上の問題があって、そういう代替措置によりテストを受けた成績を正規のテストの成績として認めない風潮がある。内申書に、これはつけられないという。制度上のところに踏み込んでいけないといけないということです。しかし、これも恐らく、そうになっていく。そうしていかなくてはいけない時代なのだと思うのです。ですから、渋谷の皆さん、日本を引っ張って、日本を変えるという今一番トップに立っているわけですから、ぜひこれを進めていただきたいと思っています。我々先端研としても、そういうスタンスなのであれば、全力を挙げてお手伝い、御一緒させていただきたいと思っております。今後ともよろしく願いいたします。

齋藤/ここまでの話を踏まえ、将来につながる学びを進めていく中での「今」を捉えた上で、何を学ぶか、どのように学ぶか、何ができるようになるかということに向き合うことが大切だと考えます。学びの本質は何かということです。新学習指導要領の解説では、総則のみならず、各教科の項目に、「障害のある児童(生徒)への配慮についての事項」について記載されています。渋谷区の先生方にはこれまでも幾度もお伝えさせていただいておりますので、うなずいてくださっておりますけれども、一部、紹介させていただきますと、読み書き計算等の困難さや注意の集中を持続することが苦手であるなど、学習活動を行う場合に生じる困難さが異なることに留意し、個々の児童(生徒)の困難さに応じた指導内容や指導方法を工夫することを各教科において示すとともに、例えば、中学校学習指導要領解説の国語には、「比較的長い文章を書くなど、一定量の文字を書くことが困難な場合には、文字を書く負担を軽減するため、手書きだけでなくICT機器を使って文章を書くことができるようにするなどの配慮をする」と明記しています。世の中の動向も変わってきているところがあるので、そこを正しく理解して、井上先生のように、テクノロジーありきではなく、子供の実態をしっかりと見取ることのできる教員がやはりテクノロジーも上手に活用できるというふうに思いますので、そこができる教員や支援者が増えていくとよいです。自分の立場としてできることに、これからも力を注いでいきたいです。

井上/教師という立場にあると、子供のことは一生懸命やって当たり前と思われているところがあります。もちろん当たり前です。でも、教師も保護者も子供に一生懸命なのは当たり前かもしれないけれど、方法が見えないときは苦しくないですか。私は苦しかったです。ここで苦しんでいる子に何をしてあげればよいのか分からないときは本当につらかった。ICTに限らないかもしれないですけど、「方法って必ずある」ということを子供たちの姿から信じることができました。方法に出会えることは子供たちの幸せですが、私たち教員、支援者も支えられます。「こうすればできるんだ」ということが分かれば、「ならば、これもできる、あれも試してみよう

か」といろいろアイデアが出てくると思います。そしてその方法が、「比べる」ことで必ず出てくると思います。少なくとも今回の「読み上げる」、「選択する」という中で子供たちを見ていくことで、この子が困っていることはどの辺なのかが見えてくると思います。必ず方法はあるはずで、方法を一緒に探しましょうということを伝えたいです。

(5) 閉会の挨拶

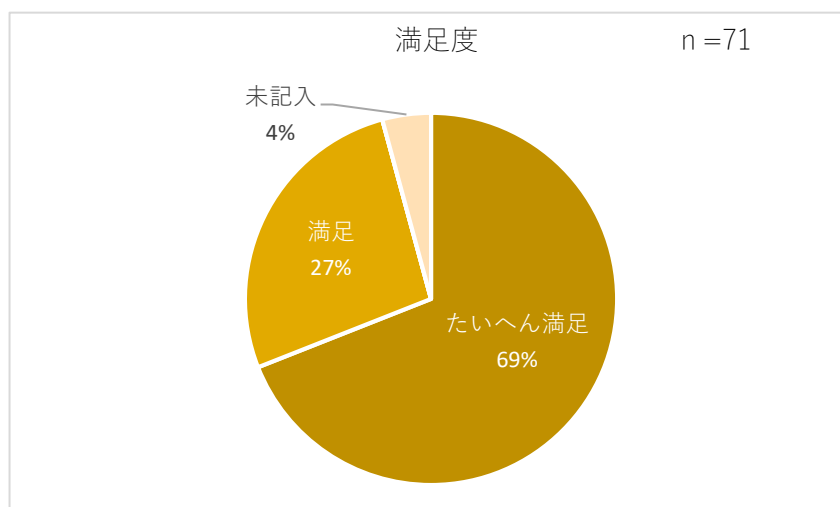
鴨志田 暁弘(渋谷区教育委員会事務局 教育振興部長)

先程の講演にもありましたが、子供の入口と出口を見付け、それについてICTが補助をするといったことについて、渋谷区では幸いにも環境が整っています。教育委員会の立場としては、この環境を最大限に活かし、中邑先生から指摘のあった制度的な壁にも、徐々に解決という表現が適切か分かりませんが、そういう壁を少しずつ打開していくきっかけが、東京大学先端科学技術研究センターとの連携で見い出せばと思います。他の地域の先生、保護者の方々がネットワーク化され、取組事例を共有していくことが重要だと思います。今日を契機として、先生方、保護者の方々と連携をとりながら、引き続きこの分野の取組を進めたいと思いますので、どうぞよろしく申し上げます。

4 評価

(1) 満足度

「たいへん満足」、「満足」、「不満」、「たいへん不満」の4段階評価による。



(2) 感想・意見等

- インクルーシブ教育にどう取り組んでいくかについて、教員としてどうすれば良いか、途方に暮れていましたが、お話を伺って、光が見えた気がしました。(50代教員)
- タブレットやICTを使うことで効果的に学習ができる生徒が多いことを知ることができました。「みんなと同じ」を求めてしまいがちな、私たち教員の意識を変えていかなければならないと思いました。(30代教員)
- 近年参加した研修で一番実りがあるものでした。私自身がLDなので、研修会の写真がOKだったのはとてもありがたかったです。(30代教員)
- 臆せず取り組んでいこうと気持ちを新たにすることができました。(40代教員)
- 代替手段を使っても同じ評価をしていくことが共通理解できるようになるとよいです。(50代教員)
- 今受け持っている児童と実践発表に出てきた児童を重ねてしまい、目からウロコでした。指導に活かしていきたいです。(20代教員)
- 「必ず方法がある」と信じる入口に立てました。(20代教員)
- できないことをやれやれというのではなく、大人ができるように工夫していかななくてはいけないと改めて思いました。ICTの可能性を考えました。(30代教員)
- ICTの活用により、子供たちの学びが広がると考えつつも、なかなか踏み出せなかったり、環境を整えることが難しかったりしますが、一步踏み出そうと思えました。(30代教員)
- 渋谷区の実践も聞けると、なお良かったです。この取組を渋谷区だけでなく、東京都全てに広げてほしいです。(40代教員)
- 平林先生の報告がたいへん興味深かったです。ぜひ公表していただきたいです。井上先生のお話はたいへん勉強になりました。(40代教員)
- 今後もこのような事例紹介を聞きたいです。不登校に対する取組も聞きたいです。(50代教員)
- 井上先生の話聞きことができ、とても良かったです。今年度、情緒学級の担当になり、どのような支援がいいのか悩んでいました。先生の話聞いて明日からがんばろうと思いましたが、心が軽くなりました。(30代教員)
- 現場の先生の貴重な実体験のお話は、親としてうらやましい限りで、この場に来てくださった教育のお仕事をされている方々の意識の高さを強く感じ、うれしく思いました。もっともこの活動が広がり、つまずいている子供たちに寄り添ってほしいです。(40代保護者)
- ICTを利用することの意味、効果を具体的に知ることができて良かった。期待するものは大きいですが、これが単なる先生方の過重労働を招くとするなら工夫が必要かと思います。(40代保護者)
- 渋谷区の行政の方々はこんなにも考えて様々な取組を行おうとくださっているのに、実際の現場にその思いが伝わってきていないように感じる。その差にショックを受けました。どうしたら子供のできる部分を伸ばせるのだろうと、もがき続けています。(30代保護者)
- タブレットでノートテイクする配慮を受けている子供の親です。他の学校にも同じような生徒がいることが分かり、心強く感じました。(40代保護者)

- 短い時間ながら、たいへん有意義なお話を聞くことができたと感じています。一人一人の特性を見極めてサポートしていただける状況があることに、明るい未来を感じました。今回のテストの結果や今後に対しての気付きが現場で苦しんでいる子供に活かされていくよう進んでいくこと、教員の皆様はただでさえ日々たいへんだと思いますが、このセミナーのように意識を高めてくださることを願います。(40代保護者)
- 先生方の負担が増えないよう、予算を増やす、人員を増やすなど、先立つものを行政に準備していただきたい。(40代保護者)
- 学習障害の子をもつ保護者です。渋谷区の実践から、今後ICTを学校で使うヒントを知りたくて来ました。素晴らしいトークセッションでした。得たことを、学校と共有していきます。他区でも、このような取組を進めてほしいです。(30代保護者)
- 子供が、読み書きが苦手です。ICTを利用して支援するヒントがたくさんあり、とてもありがたかったです。夏休み、頑張ってみようと強く思いました。(40代保護者)
- ICTによって小中で学びの楽しさを知った子供たちに、渋谷区から更に広がって、高校、大学と夢をもっていけるように道を開いて欲しい。(50代保護者)
- 今後、子供の声が聞けるセミナーがあれば参加したいです。(40代その他)
- 比べるテストを基にして支援を行った後の子供たちの変化について知りたい。(50代その他)
- 多様な学びを支えるICTの重要性を実感しました。(50代その他)
- 内容が分かりやすく、熱意が伝わりました。(ありがとうございました。(30代その他))

以上